

御前崎市スクラムスクール運営協議会記録

1 日 時 令和5年5月18日（木） 午後7時から8時40分まで

2 場 所 御前崎市研修センター

3 内 容

(1) 教育長あいさつ

御前崎の灯台は国に13ある重要文化財の中の一つで、来年150周年で、地元の誇れる文化遺産である。御前崎のスクラムスクール運営協議会も、いろいろな会合に行くと「御前崎市はスクラムスクールをやっている」とだいぶたくさんの人から言われるようになり、新しい誇れる伝統になってきた。今年も今日の会合からスクラムスクールが始まるが、中身を更にグレードアップできるようにみなさんで話し合いをお願いしたい。

スクラムスクール運営協議会は、静岡大学教育学部の中村美智太郎先生、島田桂吾先生に御指導をいただいている。本日も島田先生に御講話をいただき、最後に中村先生に御指導、御助言をいただくことになっている。

スクラムスクールは、第2次御前崎市総合計画に基づき、将来の都市像「子どもたちの夢と希望があふれる街、御前崎」に向けて取り組んでいる。教育文化分野では「郷土を愛し未来を創る人づくり」を柱に取り組んでいる。その中で、園、学校、家庭、地域、行政がそれぞれの役割を理解し、協力することで、子どもの成長を支え、途切れのない教育を目指している。私たちがスクラムを組むことで、相互の教育力を相乗的に高め、子どもには「知、徳、体」の調和のとれた生きる力を育むことが期待でき、地域では、世代を問わず、誰もがいつでも何処でも学べる「学びの環境」を整えることができると考えている。今の子どもたちを守り育てていくことが未来の御前崎を創ることだと思う。今から具体的なスクラムスクールのこれまでの歩みや、今年の内容について学校教育課長より話をさせていただくが、それぞれの立場から御意見をいただき相互理解を深め、よりよい協力体制をつくっていくことを願っている。

(2) 学校教育課より(学校教育課長)

「スクラム運営協議会について」

今までの経緯

御前崎市スクラム運営協議会は平成26年の4月からスタートし、今年で10年目の節目を迎えている。10年前、子どもたちを取りまく環境は非常に厳しく、少子高齢化や地域コミュニティーの希薄化、対人関係に悩む子どもの増加、小1プロブレム、中1ギャップ等がみられた。そういった中、社会全体で子どもを育てるとともに、園や小や中高において、子どもの学びと育ちを途切れないようにしようということでスクラムスクール運営協議会をスタートした。このように、地域も家庭も学校も園も社会総がかりで御前崎の子どもを育していく取組を、「スクラム御前崎」としている。

園や小学校、中学校、池新田高等学校の縦の連携と家庭や地域といった横の連携を通して「郷土を愛し、未来を創る人づくり」を推進している。

発足は平成 27 年度であるが、県のコミュニティースクール推進事業の指定を受け、学校では解決できないような問題も山積していたため、家庭や地域の力を借りながら解決していくという形でスタートした。

会議の中で子どもたちのために取り上げたいことや、やってみたいこと、夢や希望がたくさん出てきた。ところが当時は運営協議会の在り方のロールモデルが少なく、具体的にどのように会を運営していったらよいか分からず、目的を見失うこともあった。試行錯誤を繰り返した後に、「御前崎の子どものためにつながろう！つながりを築こう」と、目的をはっきりさせて取り組んできた。何かをやり遂げなければいけないということではなく、「子どものために、連携をとっていこう」という大きな目的を目指して取り組んでいる。そして、各園、小、中、高、地域、家庭、行政がつながっていくために共通のテーマとして考えられたのが「早寝、早起き、朝御飯」である。生活習慣の乱れは学習意欲や体力、気力の低下につながる。このことは、調査結果からも顕著である。そのため朝御飯の摂取に関わる睡眠時間、ネット依存やゲーム障害などをテーマに話し合ってきた。その取組が評価され、令和 3 年 3 月に当時の文部科学大臣から学校、家庭、地域、行政が一丸となった「早寝、早起き、朝御飯の推進」が評価された。

令和 3 年度より、各学校で行われていた学校評議員会をとりやめ「スクラムスクール運営協議会」とした。したがって、御前崎市スクラムスクール運営協議会と学校スクラムスクール運営協議会の 2 本立てとなった。

本市で行う御前崎市スクラムスクール運営協議会は、御前崎市全体でつながり課題を共有して、未来を育む人づくりを目指している。各校で行われる学校スクラムスクール運営協議会については、各学校の実態や課題に応じた機動力ある協議会となった。

本年度の取組

学校単位で行われるスクラムスクール運営協議会では、各学校の経営方針を共有して学校の課題を解決する方策を協議している。市で行うスクラムスクール運営協議会では、毎月 10 日に開催する「スクラムグッドマナー運動」「早寝、早起き、朝御飯の推進」など、子どもの生活習慣の課題について取り組んでいく。子どもたちの課題になっているメディアとの主体的、自律的な関わり方、言い換えれば、自己管理能力について、この後グループ協議でも話題にして市全体で取り組んでいく。メディアとの主体的、自律的な関わり方について、学力調査等の分析を通して学力とメディアとの関わりについて分析し、市民の皆様と共有する。

小学校では情報モラル研修を実施する。各園では、浜松学院大学今井学長によるゲーム障害、ネット依存の講演会を開催する。どうすればメディアと主体的、自律的な関わりができるか、自己管理能力を育成することができるのか、この後のグループ協議で話題にしていただければと思う。

この後、静岡大学准教授島田様に御講演をしていただく。その後のグループ協議や学校スクラムスクール運営協議会における様々なヒントをいただければと思う。

(3) 講話

島田桂吾 静岡大学教育学部准教授 「学校スクラム運営協議会への期待」

学校評議員と学校運営協議会の違い

学校評議員と学校運営協議会と何が違うのかということをよく聞かれるが、一言で言うと学校評議員は、校長先生のアドバイザーである。正確に言うと諮問機関である。校長先生がアドバイスをいただきたいものについて保護者や地域の方にお願いして、それに対して意見をもらう。学校運営協議会は、御前崎市でいうと、「学校スクラム運営協議会」という協議機関、話し合う機関である。学校の経営方針をはじめとした学校の運営について、学校の先生以外の地域や保護者の立場から一緒に議論しながら一緒に決めていくための、話し合うための機関が学校運営協議会というものになる。

なぜ、こういったものが設置されることになったかと言うと、「社会に開かれた教育課程の実現」のためである。教育課程というのは各学校の教育計画のことである。学校の経営方針のカリキュラムという方がイメージしやすいかと思う。教育課程は誰が策定する権限があるかというと基本的には各学校である。それは今でも変わらない。今、社会が大きく変わってきた。しかし、学校の先生だけが決めていると学んだことが社会でいきないのでないかとか、今まで授業は学校の先生の特権であったが、学校の先生ではなくて、地域や企業が教えた方が子どもたちにとっていい内容のものもあるかもしれない。学んだことが社会に出て活用できることが、今求められている。学校だけが作ってきた教育課程を地域や保護者の視点から見て社会に活用できるか、「活用できるためにはこんなことをしたらいいのではないか」というアイディアを出してもらいながら、一緒に教育課程を作っていくをキャッチフレーズ的に言ったのが「社会に開かれた教育課程」と解釈している。

では、そのためには何が必要かと言うと、前提と目的と方法の三段階である。この前提は「よりよい学校教育をとおして、よりよい社会を創る」という理念を学校と社会が共有しましょう」と言うことである。学校は何のためにあるかというと、子どもたちの幸せのためであるが、社会を創っていくという理念を、地域や保護者の方と共有するというのが前提の一つである。そういった前提に立った上で、ここで言う目的というのは、学校の教育課程の目的である。必要な学習内容をどのように学び、どのような資質、能力を身に付けられるようにするのか、それを教育課程において明確にしましょうというのが目的である。

学校は、授業や教育活動をしたり生徒指導をしたりすることが大きな仕事であるため、よりよい社会を創っていくことが大きな前提となる。では、よりよい社会を創る子どもたちにどんな内容を教えればいいのか、どういう方法で教

えたらいいのかは、教えることがプロである先生たちが決めていく。それを学校の経営のプロである校長先生が基本的にはつくっていく。それを学校経営方針という。

方法としては、学校の先生が教える方が教育の効果が高ければ継続すればいいし、企業や地域の人が関わった方がよりよい社会を創るという理念を実現するような活動や支援方法であれば、それは適宜選択をしていく。それが社会との連携及び協働によりその実現を図っていくという方法である。

2018年国際教育環境調査、OECD先進国の40か国が集まった会議があり、その中で学校の環境国際比較を行った。学校の意思決定に対する見解として、中学校の校長先生が回答者になったものである。「重要な意思決定は校長自身が行う」ということに対して、日本の中学校の先生は94.5パーセントであるが国際平均は29.3パーセントである。では、海外の学校は誰が意思決定に関わっているかというと、「保護者の意思決定に積極的に関わっていく機会を提供している」が83パーセントである。それに対して日本は41.5パーセントである。

「生徒が学校の意思決定に参加する機会を提供している」が81パーセントに対して、日本は32.6パーセントで非常に低い数字が出ている。今までの日本の学校は、校長先生がほぼ意思決定を行っていた。それだけ責任を校長先生が担ってきたとも言える。これから大きな社会変化、「社会に開かれた教育課程」という前提に立ったときに、果たしてそれが適切なのかという問い合わせが出てきている。学校の中だけで一生懸命やっていたこと、学んだ内容が社会にいきるかどうかというのは、地域や保護者や場合によっては子どもたちの視点から一緒につくっていくというのが、結果的には「社会に開かれた教育課程の実現」につながるのではないかと思う。

先生と保護者と子どもたちを含めていろいろな立場の人が関わる中で、どういう手段をとったら「社会に開かれた教育課程の実現」につながるかといったとき「熟議」という手段がある。「熟議」という言葉を使うか「協議」という言葉を使うか「話し合い」という言葉を使うかは人それぞれである。話し合わないとどういうニーズがあるか、どういう立場の違いがあるか、どういう内容が効果的なのかが分からぬ。分からぬから一緒に議論しながら一緒に決めていこうということである。その議論する場が今まで法的に整備されていなかった。そこで、数年前から「学校運営協議会を原則置いてください」と国が方向を転換した。御前崎市は、教育委員会で8年前から作っており、2年前から学校ごとに学校スクラムスクール運営協議会というのを立ち上げた。何のために学校スクラムスクール運営協議会が立ち上げられたかというと、熟議をするためである。では、何のために熟議をするかというと、「社会に開かれた教育課程の実現」という大きな理念を具体化するための手段として、話し合う機関として設置されたのである。これを政治学の理論からすると、市民参加のはしごという考え方がある。そのはしごの8段目、住民によるコントロールというのがある。住民、地域の人たちが自

分たちで自分たちのことを決めていく。昔のギリシャ、アテネの直接民主制に近いイメージと思っていただければと思う。御前崎市はどの段階を目指すのかというと6段目、パートナーシップ、住民と権力者との間で決定権が共有される状態というところを目指していくのが一つかと思う。

学校経営方針は各学校が作る。最終的な決定権はそこにあるが、それを学校という場だけで決めるのではなく、そこに地域や保護者や子どもたちが関わりみんなで決めていく。そうすることが、「社会に開かれた教育課程」に一番近づくのではないかと捉えている。

この話をすると、「学校の専門的な内容に私たち素人は口出しできない」「意見を言うと迷惑を掛けるのではないか」と言う人がいる。それに対していろいろな考えがあるが、最近の議論では専門家ではない人の意見というのが大事になってきている。参加型テクノロジーアセスメントとも言われる。専門家ではない人が関わることによって、結果的に適切な判断を下すケースが多いのではないかと思う。

日本の政策でいうと、裁判員裁判が近いかと思う。裁判員裁判によって何が変わったかと裁判所に尋ねたら、言葉遣いと言っていた。裁判官は法律のプロなので、法律用語だけで判決文を作り判決を言い渡していたが、再犯ばかりで伝わっていなかつたのではないかという反省があった。被告人に伝えるときの伝え方として、ただ文章を読み上げただけではなく、被告人の再犯を防止するための伝え方や言葉遣いというものを、裁判員の方から教えてもらったということであった。学校にいると、専門用語が結構多かったりするが、専門ではない人の素朴な意見とか感覚というものは大事になってくる。そういうことも期待している。

二つの正当性ということを私はよく使うが、正当性については Justness (内容的な正しさ) と legitimacy (手続き的な正しさ) という二つの考えがある。

Justness (内容的な正しさ) は、これまでも、これからも学校は大切にしてきたと思う。legitimacy (手続き的な正しさ) については、学校の中だけで決めていたところが多かった。そこに地域や保護者の方が関わることによって、手続きが一つ増えることにはなるが、それが説得性を増すことにもつながるのではないかと思う。

学校運営協議会の活用

大分県の中学校では、挨拶を学校目標にしているところがあった。そこでは、学校目標をどう具体的な活動につなげていくかということをテーマにして、長年議論している。挨拶については御前崎市も大切にしている。そういう意味で参考にしていただけたらと思う。

私が関わっている榛原高等学校では、ここ2、3年経営戦略について熟議を行っている。なぜかというと、定員割れが数年続いている。なかなか生徒が増えない。どうしたらいいか学校の先生方で議論してきたが、なかなかいいアイディアが浮かんでこない。そこで運営協議会のテーマに上がった。運営協議会の委員に

伊藤園の工場長がいるため、伊藤園の経営戦略から学ぼうということで、伊藤園の「おーいお茶」がなぜここまで売れるようになったかプレゼンをしていただき、そこから学ぼうという会議を運営協議会で行った。伊藤園のお茶は静岡県のお茶ではなく鹿児島とか九州らしい。大量生産するためには平坦がいい。静岡のお茶は山が多く大量生産に向かないため、工場は静岡県にたくさんあるが葉っぱは九州から持つて来ている。お茶のサイクルを聞いたら味を毎年変えていたことであった。「おいしい」と言うのは変わらない言葉であるが、おいしいという感覚は毎年違うそうである。それは葉っぱの状況とトレンド、人の感覚が変わっているかららしい。おいしいという目標は変わらないが「おいしい」という言葉をもらうためには、変え続けなければならないということを話されていた。

「榛原高等学校は伝統が160年あるが、伝統はただ守るだけではつながらないのでは」という議論になり、今いろいろ変えようとしているところである。学校外の意見を使い、そこから経営戦略、ここでいうと学校経営目標に関わるところを見直していくことも一つかと思う。

板橋第4小学校では、「子どもと大人とで熟議をしましょう」というテーマで前半は子どもたちだけでの議論、後半は大人と子どもが一緒に熟議をするという取組をしていった。これは、スクラム御前崎に近いかと思う。子どもが関わると大人も生き生きする。「子どものため」と言うと、つながりをもちやすいかと思う。参考にしていただけたらと思う。

「熟議」のポイント

真理の追及はしない。

他の自治体でよく聞くのが、「話しにくい」ということである。硬すぎるとなかなか意見が言いにくいということをよく聞く。熟議をしやすい雰囲気づくりというのが、ポイントになってくる。そのためには、司会者のコーディネート力と時間、事前準備が大事である。みんなで練り上げるということを楽しむ。楽しまないとなかなかつながっていかない。最近では特に学校の困り感、学校だけでは解決できないこと、「皆さんからアイディアを下さい」と言うとけっこう出でたりする。「早寝、早起き、朝御飯」もそこから出てきた。学校は学校が、家庭は家庭がそれぞれやるのではなく、共通の課題として熟議しながらそれぞれ何ができるかということを膝を突き合わせながら熟議をしてもらえると、「社会に開かれた教育課程の実現」ということにつながっていく。協議は学校や地域ごとに変っていい。学校評議員的なアドバイザーから熟議を楽しむ機関として、そして皆さんのがその準備をするメンバーとして、ぜひ盛り上げてほしい。

(4) 分散会

テーマに沿って協議・意見交換

(5) 指導・助言 静岡大学教育学部准教授 中村美智太郎 氏

自己管理能力というのは二つの言葉で表現することができる。一つは自分で立つ「自立」。もう一つは自分で律する「自律」である。両方とも「じりつ」という

言葉で表現するが、両方とも自己管理能力に関わる言葉である。

「自立」ということは、文字のとおり自ら立つという、子どもが自分の力で社会に出て生きていけるような力のことを指している。前半で島田先生から「社会に開かれた教育課程」という言葉があったが、社会に開かれた教育課程とは何を目指しているのかというと、漢字二文字でいうとおそらく社会に出て自分で生きていける力「自立」を指しているのだと思う。それがいろいろなエラーがあり、うまくいかないと、「引きこもり」「不登校」といったことが続いてしまう。そういった子どもの数は全国的にも増加傾向にあると言われている。自分で立つというところがうまくいかなった例かもしれない。ただ、長期的に見れば途中から自分で立って歩いていくかもしれない、短期的にうまくいかなくてもそこで絶望しなくともいいのではないかと思う。いずれにしても学校の教育は小学校、中学校、あるいは幼稚園、保育園、あるいは高校、その先から自分で立って生きていける力を付けてほしいと皆が考えている。昨今では学習指導要領でも「社会に開かれた・・・」と言う言葉をキーワードにしている。

「自律」自分で律する。このことは意外と難しい。自分で自分のことを律することができるということはかなり高度な能力であると思う。大人でも自分で自分を律するということはなかなか難しいことである。大人はなぜ大人かというと、「自立」がある程度自分でできているので「大人」と言われているかもしれない。しかし、「自律」については生涯付き合っていく課題であると思う。「自己管理能力を育む」と言ったときに、自分一人で生きていくという能力に光を当てたいという場合は「自立」。自分は完璧にできなくても「少しでもこういう自分でいたら素敵だな」とか「なかなかできないけど早寝、早起き、朝御飯ができたらよかったです」とか、そのように思いながら失敗を繰り返しながら少しづつできるようになっていき、大人なっても失敗を繰り返しながらいくのが「自律」ではないかと思う。どこかのグループで、子どもに失敗させることが大事なのではないかという学校の方針を説明されていたように聞いた。まさに失敗をするということは割と大事になってくるのではないかと思う。大人なっても失敗し続ける訳であるため、子どものときに失敗しておかないと大人なって失敗した自分を許せなくなってしまう。そうなってしまったら人生があまりハッピーでなくなってしまう。失敗したら「そういう自分でもまあいいかな」と思えるような仕組みや環境が大切であると思う。

いろいろな言葉の意味がある中で、自己管理能力について、この二つの側面から説明することができそうである。それぞれのグループの振り返りの参考にしてもらえばと思う。

最初の講話の中で「熟議民主主義」という言葉が登場したが、「熟議民主主義」という言葉は最近いろいろなところで議論になっている。今日、各グループの話を聞いた感覚だと、まさに熟議民主主義が成立していたという感想をもった。

「熟議民主主義」の定義はというと、一人で熟議をするのではなくみんなで熟

議をしながら協議することである。これができるているコミュニティーを「熟議民主主義が成り立っている集団」という。一人で熟議をするということも大事であるが、それを他の人と分かち合うということが熟議民主主義の形態である。ポイントとして一つは理性的であること。感情の揺れ動きはあるがそれをコントロールできていること。二点目として、全ての人が参加しているということ。特定の人を恣意的に排除せず、それぞれの団体から参加が認められていること。三点目として、全ての参加者は平等であるということ。年齢が違ったり立場が違ったりしたとしても、その場としては全員同じスタンスで話し合う。四点目として、手続きやルールの再検討を行う、そういう力があるということである。自己管理能力を育む上で一つの結論である。今日は結論が得られなかつたけれども、それを考え続けるということである。今日話し合いの人数が少なすぎたなとか、あるいは多すぎたなとか、感じた方は別の機会に自分たちが話しやすいコミュニティーを作つていけばいい。あるいは、二人でもっと話したいとか、三人で話したいとか、あるいは教育長さんと話したいとかいろいろあるかもしれないが、話し合いそのもののプロセスも一定ではないので次々と変えていいということも大事なことである。これら四つを満たしているのが一般的に「熟議民主主義」と言われている話し合いの形態である。

結構研究が進んでいて、どうやつたらこれが実現できていくのかという明確な指標が五つある。一点目は正確で十分な情報が全員に行き渡っている。今日は「自己管理能力を育むためには」というテーマであるが、これに関する正確な情報、自己管理ってどういうことなのか、うちの学校ではこういうことなのだということがグループの中で行き渡っていることが望ましい。二点目はバランス。参加者の中に偏りがない。いろいろな所から来てその十分満たされたバランスが成り立っている。かつ、ある意見を出した人に対して別の意見を出してもいいということが保障されている。ある人が言ったことと自分は違うけど違つていいんだ。違う意見が言えたというところでこのバランスが満たされていると考えられている。三点目は多様性ということである。いろいろな立場の人がいて、それは必ずしも所属先ではなく、いろいろな考え方、自己管理能力を二つの「じりつ(自立、自律)」という言葉で考えたが、一つの考え方であると捉えている。四点目は誠実性ということである。参加者の話をちゃんと聞いたかどうか。相手が安心して話せたということは誠実性がそこに見られたということである。あるいは自分の気持ちを嘘偽りなく話せたかどうかということも誠実性に関わることである。五点目は考慮の平等ということである。全ての参加者の全ての意見がどの程度、誰が発言者かということと無関係に論点にできたかということ。発言する人が偉い人だからとか、発言する人が年上だからとかといったことと関係なく意見を純粋に聞くことができたかどうかということ。この一点目から五点目までのことを全部満たしていることは難しいため、最近の研究ではどれをどの程度生かせたかスコア化している。今日の話し合いを自分なりにどこがどの程度満たせていたか振

り返って、「ここは・・・」とうところがあれば次に改善していけばいいと思う。ある部分では100中の80、ある部分では100中の30と、ばらつきがあるかもしれない。ばらつきがでても問題はない。次の改善点を考えるというのは話し合いのポイントである。今日のテーマに寄せてみると、子どもたちが自己管理能力を身に付けるとか、自分で育てるとか、こういうふうに子どもたちの話し合いが成り立つたら自分のこととして少しでも考えることができるのではないかと思う。たぶん「自己管理能力を身に付けなさい」と大人が言ったら、「ああそうか、自己管理能力を身に付けなくてはいけない」というふうに思ってしまう。自分で自分のことをどうやって生きていきたいか、どうやって過ごしていきたいか、それを学校でもっと大切にしてくれたら自己管理について主体的に考えられるかもしれないと思う。もちろん大人が良くなってほしくて注意するのだと思うがなかなかそのことは分からぬかもしれない。今何をしたいのか見取ってあげることも大切である。これは大人の話にもよく使われるが、子どもの話し合いでもよく考えられる基準になる。

補足である。熟議民主主義の最先端の議論はどうなっているのか。話し合いは二つの側面があるとされている。一つはフォーマルな熟議、議会とか裁判所とか、オープンなオフィシャルな場面で行われる議論の形態である。意思決定をしなくてはいけないという大きな制約がある。期限があつてここまでに決めなくてはいけない。そのため多数決みたいなものが採用されてしまう。このほかにインフォーマルな熟議がある。これは必ずしも決定の責任を負わなくてもいい。私たちが普段オフィシャルな中ではない中で生きている場面で話し合ったときにできてくる、意見交換したときに起こりうる意見の形成である。スクラムスクールは面白いと思う。フォーマルなところとインフォーマルなところ、両方とも入っている。いろいろな立場の人が参加しているのである程度オフィシャルなところもあるが、インフォーマルなところも大事にしている。このバランスが大切かと思う。スクラムスクールというのはそこが結構うまくいってきたところかと思う。何かある期限で自己決定しなくてはいけないというようなそういうものを背負っているわけではないというところと、議論の中身をいろいろ変えてもいいんだというところが大事なのだと思う。「早寝、早起き、朝御飯」は確かに大事であるが、新しいテーマでやってみたいと皆さんが思われたら、それは変えてもいいところである。この二つを区別して考えるというのが昨今割と指摘されているところである。

皆さんの話を聞いて私が感じたことを述べさせていただいた。

(6) その他

社会教育課より

社会教育課では、子どもたちを取り巻く現状や課題を共有し御前崎だからこそできる御前崎人を育てる、高めることを目的としてスクラム御前崎の集いを毎年開催している。今年度は島田先生のアドバイスもあり子どもを交えてのスクラム

御前崎の集いを行うことになった。その内容として学びの航海図を使ったワークショップを行う。学びの航海図は社会教育課が作成したシートになる。7月29日土曜日に御前崎地区センターで実施する。スクラム運営協議会から代表の方と小中学校のPTA役員の出席をお願いしたいと考えている。